



Title	脳卒中における障害脳動脈と眼底所見の関連性について
Author(s)	中尾, 雄三
Citation	大阪大学, 1982, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33130
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	中尾 雄三
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 5543 号
学位授与の日付	昭和57年3月3日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	脳卒中における障害脳動脈と眼底所見の関連性について
論文審査委員	(主査) 教授 真鍋 禮三 (副査) 教授 正井 秀夫 教授 最上平太郎

論文内容の要旨

〔目的〕

脳卒中患者の眼底所見についてはすでにいくつかの研究があるが、その結論は一定ではない。

脳動脈は分布様式から、脳底部主幹動脈の本流で長く大脳皮質、皮質下まで走行する皮質枝系動脈と、主幹動脈から小さく分枝し、基底核、内包、視床を穿通する穿通枝系動脈に大別される。これらは解剖学的、病理学的に異った特徴を有している。このため、脳卒中患者の眼底所見を明らかにするには脳卒中の障害脳動脈を皮質枝系と穿通枝系に分類し、各々について眼底所見を検討する必要がある。しかし、脳血管撮影による穿通枝系脳梗塞の診断が困難であったため、従来の研究では脳梗塞は一括して眼底所見が検討されていた。

近年 CT スキャンの導入により脳梗塞と脳出血の鑑別は容易となり、脳血管撮影ではとらえられなかった穿通枝系動脈の梗塞や出血もはじめて正確な臨床診断が可能となった。

そこでこの研究は脳梗塞のうち、CT スキャンと脳血管撮影を用いて診断された皮質枝系脳梗塞と穿通枝系脳梗塞について眼底所見の特徴を明らかにし、梗塞動脈の種類と眼底所見の関連性を明らかにすることを目的とした。

また脳出血のうち、大部分をしめる穿通枝系脳出血についても同様に眼底所見を検討し、穿通枝系脳出血と眼底所見の関連性について研究した。

〔方法ならびに成績〕

対象は CT スキャン、脳血管撮影、眼底検査のおこなわれた大脳の脳卒中患者のうち、皮質枝系脳梗塞134例、穿通枝系脳梗塞94例、穿通枝系脳出血53例であった。

皮質枝系脳梗塞は CT スキャンで大脳皮質、皮質下に低吸収域がみられ、脳血管撮影で皮質枝系動脈の閉塞や著明な狭窄がみられたものとし、穿通枝系脳梗塞は CT スキャンで基底核、内包、視床に低吸収域がみられたが脳血管撮影で皮質枝系動脈に閉塞や著明な狭窄がみられなかつたものとした。穿通枝系脳出血は CT スキャンで基底核、内包、視床に高吸収域がみられたものとした。

眼底所見の判定は Scheie 分類一原変法にしたがい、細動脈硬化性変化と高血圧性変化的程度を決定した。

高血圧症の判定は収縮期圧 160 mmHg、拡張期圧 95mmHg のいずれかを越える血圧を有するものとした。

高血圧症の合併率は穿通枝系脳出血 91%，穿通枝系脳梗塞 70%，皮質枝系脳梗塞 52% であった。合併した高血圧症の内容は、穿通枝系脳出血の多くは高度高血圧症であり、穿通枝系脳梗塞の多くは罹病期間が 8 年以上の高血圧症であった。

脳梗塞患者の眼底所見のうち、細動脈硬化性変化 II 度以上の出現頻度は穿通枝系脳梗塞では 60% と高く、皮質枝系脳梗塞では 13% と低かった。特に高血圧症を合併し、しかも罹病期間が 8 年以上の穿通枝系脳梗塞では 72% と高く、高血圧症を合併しない皮質枝系脳梗塞ではわずかに 6% と低かった。高血圧症合併例での高血圧性変化 II 度以上の出現頻度は穿通枝系脳梗塞では 59% で、皮質枝系脳梗塞の 35% よりも高かった。しかし、細動脈硬化性変化ほど両脳梗塞間に差はなかった。

穿通枝系脳出血患者の眼底所見のうち、高血圧性変化 II 度以上の出現頻度は 88% で、いずれの脳梗塞よりもはるかに高く、特に高度の高血圧症では高かった。細動脈硬化性変化 II 度以上の出現頻度は 35% であった。

〔総括〕

脳卒中における障害脳動脈と眼底所見の関連性を検討し、以下の結果を得た。

1. 穿通枝系脳出血と穿通枝系脳梗塞は高血圧症の合併率が高かった。穿通枝系脳出血の多くは高度の高血圧症を合併し、穿通枝系脳梗塞の多くは罹病期間 8 年以上の高血圧症を合併していた。
2. 眼底の細動脈硬化性変化は長期間の高血圧症を共通の因子として、穿通枝系脳梗塞には密接な関連性をしめたが、皮質枝系脳梗塞には関連性をしめさなかつた。
3. 眼底の高血圧性変化は高度高血圧症を共通の因子として穿通枝系脳出血にに関連性をしめた。

以上の結果から眼底検査は脳動脈のうち、穿通枝系動脈の病変を推察するうえで臨床上、有力な手段であると考える。

論文の審査結果の要旨

脳卒中患者の眼底所見の特徴については従来、一定の結論は得られていなかつた。

本研究は脳卒中患者を CT スキャン所見により皮質枝系障害と穿通枝系障害に分類のうえ、各々に

ついて眼底所見を明らかにし、臨床的に障害脳動脈と眼底所見の関連性を検討したものである。

その結果、眼底の細動脈硬化性変化は穿通枝系脳梗塞に、眼底の高血圧性変化は穿通枝系脳出血に
関連性をしめすことが明らかとなった。

この研究結果は眼底検査が脳動脈のうち、穿通枝系動脈の病変を推察するうえで臨床上有力な手段で
あることを強く示唆するものであり、学位論文に十分値するものと考える。